

前川麻子・作

poto・絵

カレジャナイ。

キスから先に零れる 想い

カレジヤナイ。

くキスから先に零れる想い

わたしには、大好きなお姉さんがいた。

彼女は、翠<sup>みどり</sup>さんといって、中学三年生から高校二年生までの間、わたしの家族だった。

もしかしたら、父の恋人だったのかもしれない。

「この子、太郎たろうって言うの。  
私のボーイフレンドだけど、  
青子あおこにあげるわ」



「大事にしてね」

翠さんは満足げに微笑<sup>ほほえ</sup>むと、大きなスーツケースを引っ張って、わたしたちの家から出て行った。



わたしはダイニングテーブルの  
前に突っ立って、ぽかんとして  
いた。



わたしが十七歳で、  
太郎は二十一歳。



わたしは太郎を  
もらった。

十八の誕生日に、

わたしは、

生まれて初めてのキスを、

太郎とした。



まだ、セックスを

知らなかった二十歳の夜。

わたしたちは

いつものようにキスをして、

初めていちばん近づいた。



「ねえ、この先は？」

「こっから先は、ほんとに好きな人としないと楽しくないよ」

「太郎でいいよ」

「失礼な言い方だな」



わたしと太郎は  
ずっと特別な関係だった。

あれから、十年――

わたしには太郎が大切だ。

他人に話してもわかってもらえないようなことを、太郎とは話せる。

女友達より気楽な、親友。

でも、お兄さんみたいかっついていうと、そうではなくて、もっとなちゃん、「男の子」だ。

わたしたちはキスをする。  
でも、ただそれだけ。

そこから先は、しない。

恋人じゃないから、はじまりも  
終わりもない。

どちらかに恋人がいても、何も  
変わらない。

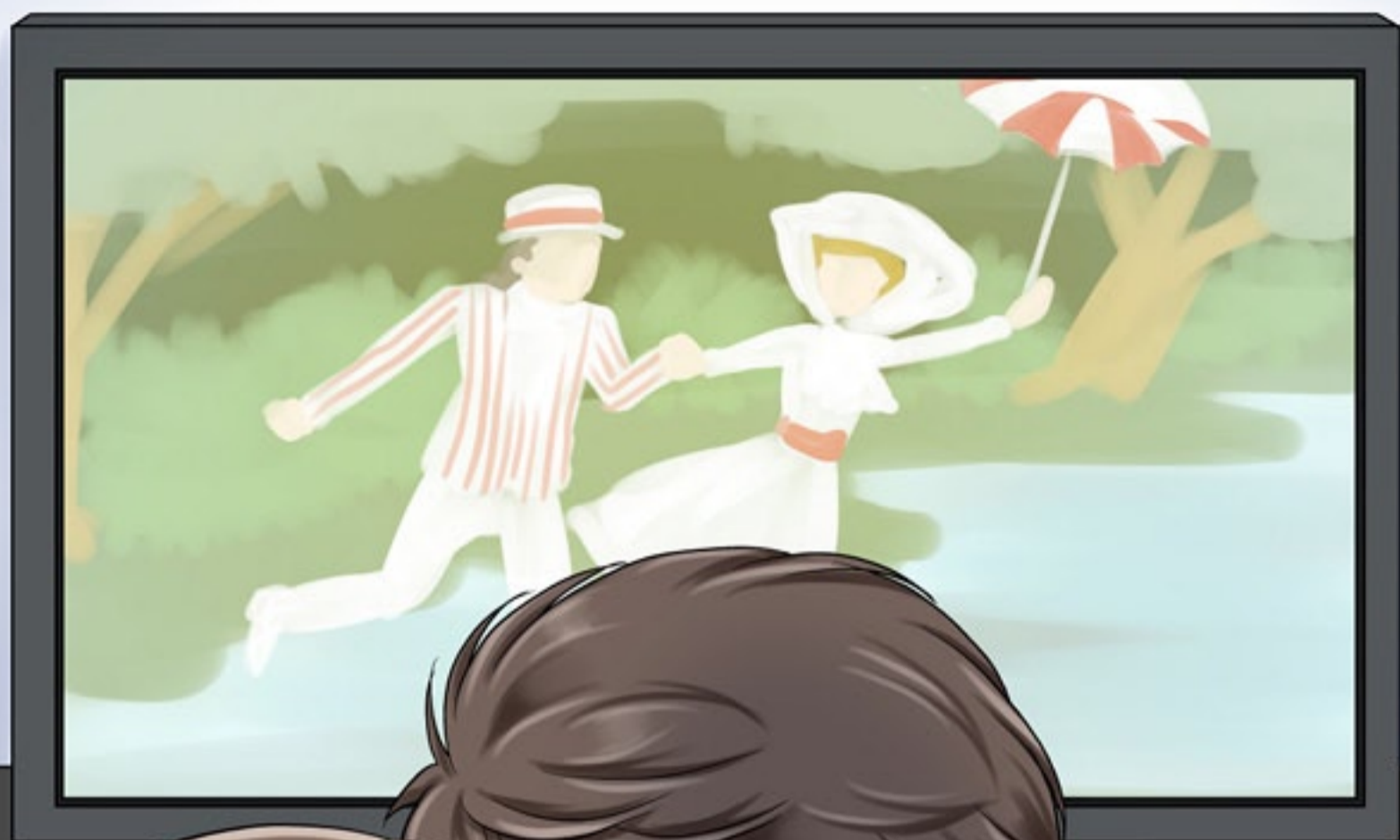
わたしは彼氏に太郎を紹介する  
し、太郎も彼女にわたしを紹介  
する。





太郎にとってわたしは特別だつて、知ってるから。

恋人なんて、当たり前前の役をやるのは、つまらない。







わたしの二十七歳の誕生日に

「どうだ、そろそろ、太郎くんと落ち着いたら」

父がそんなことを言い出した。



「太郎は、意外と結婚、すぐかもよ」

「まあ、この分じや俺が先だな」

「貧乏<sup>びんぼう</sup>研修医に嫁<sup>よめ</sup>が来るかね」

「まあ、どつちにもその気がないんじや、しようがないなあ」

わたし、たけだ武田青子・二十七歳。  
学習塾で講師のアルバイト。

② 形容詞  
③ 形容動詞



彼氏は、  
三十過ぎても芽<sup>め</sup>の出ない、  
貧乏なミュージシャンの  
タキちゃん。





郡司<sup>ぐんじ</sup>太郎・三十一歳。  
いまだに大学病院で研修医。



太郎の彼女は、  
モデルみたいにキレイで  
優しくて非の打ちどころ無しの  
トモチちゃん。



結婚したら、太郎はわたしとキスしなくなるだろうか。



わたしたちは変わるだろうか。





恋人じゃなくても、  
終わりがあるんだらうか……



初めて向き合う自分の気持ち

わたしが

一番大切にしたい想いは何？

そんなとき

太郎が彼女と別れた――

『カレシヤナイ。  
～キスから先に零れる想い』

---

前川麻子／作  
poto／絵

©2015 前川麻子 /poto  
©parsola inc.